

児玉町文化財調査報告書 第7集

真鏡寺後遺跡 I

児玉町内遺跡群保存事業に伴う発掘調査報告書5

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

児玉町文化財調査報告書 第7集

真^{しん}鏡^{きやう}寺^じ後^{うしろ}遺跡 I

児玉町内遺跡群保存事業に伴う発掘調査報告書

1987

埼玉県児玉郡児玉町教育委員会

序

書を読むにつけ、何故かしらこの現代もまた特別の時代ではないかと思えてくるから不思議です。例えば、少し前までは比較的静しかった自動車も、近ごろは児玉町においてさえ通勤時間帯ともなると小規模ながら渋滞もみられるようです。また、戦前に少年時代を過ごした我々にとって、最近の物品の消費には、ただ驚くばかりです。おそらく人類の歴史の中で、未だ使用に耐える器物を捨ててしまうということは大変珍しいことで現代を象徴する事柄と言えましょう。この現代の目まぐるしい交通と消費活動の発達によって、わが児玉町も「現代」の側面に直面し、文化財と歴史との共存がいかに難しいかを痛感させられる、今日この頃です。

しかしながら、歴史とは、このような過去からの伝統が保存的に実現されるものにほかならないものですから、「文化財の町」といっても過言ではない、児玉町の文化財の保護活用もまた我々の責務と考え、その保存に努力して参ったわけです。このたびも真鍮寺後遺跡の保存の構想につきまして、関係機関等と再三の協議を重ね、現状で保存できるよう要望してまいりました。しかし、現状での保存は難しいとのこと、やむをえず万全の調査をもって「記録」という形で後世に伝えることになったものです。

このときやかな報告書が、町民の賛成や、教育・研究にたずさわる皆様の、御参考となりえるならば幸甚に存じます。私どもも、地域に根ざした発掘とは何かを問いつつ、「文化財の町」の名に恥じないよう、社会教育に努力してゆく所存であり、皆様のこれまで以上の御協力と御叱正を、衷心より企願する次第であります。

昭和62年2月26日

児玉町教育委員会教育長

石 井 榮 一

例 言

1. 本書は、埼玉縣立埼玉大学蔵谷学術書庫に所蔵する貞観寺後遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、農林改良事業（事に先立つ見守町内農村整備保存事業として、昭和37年度に埼玉県教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査および整理・報告書に費した経費は、町費・国庫補助金・および県費補助金（埼玉県教育委員会）である。
4. 本書の編集は、整理参加者の協力を得て鈴木雅弘が行い、各執筆分冊については各文庫に記した。
5. 発掘調査および本書作成にあたって下記の方々や機関から御協力・ご協力を願った。（順不同、敬称略）
赤堀浩一、市上孝、小園忠雄、藤沢久夫、岡本卓男、松原幹夫、金子彰男、金子真土、堀西忠一、坂本雅俊、柳田隆一、藤崎一彦、清水守道、清水雅男、志村一哲、鈴木秀敏、世谷浩之、外岡重人、高橋一夫、田嶋三郎、田村誠、村松川孝雄、長瀬誠康、中村重司、野口泰南、長谷川昌、増田一祐、矢内一彰、北川進弘、埼玉縣教育財文化財保護課、埼玉縣学文化財担当委員会
6. 本書作成の主な作業分冊は、次のとおりである。
資料収集・製作・整理（町内教育、本間孝治）、図面調整（永尾肇一、岡田昌代、斎藤明子）、地図作成（奥山博樹）、写真（永尾一肇）
7. 本書は、資料を中心に編集したもので、読物等については、別途『貞観寺後遺跡Ⅱ』として刊行の予定である。

目 次

序

第Ⅰ章 契機調査の経緯	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	3
第Ⅲ章 遺跡の概要	4
1. 遺跡の概要	4
2. 基本層序	4
第Ⅳ章 検出遺構の概要	10
1. 聖域性遺構	10
2. 溝状遺構	38
3. 土壇	39
第Ⅴ章 真鍮寺後遺跡の提起する問題	45
－土器住居内通達行為について－	
引用・参考文献	47

写真図版

第1章 発掘調査の経緯

調査に至る経緯

昭和37年度奈良県教育委員会工事に伴って、歴史文化財の所在にかかると判断されたが、現在町歴史資料から昭和36年12月に町教育委員会にあった。この町を境域にかかると、『埴川郡遺跡地図』昭和36年12月に相当しており、町教育委員会の職員が直ちに現地を調査したところ、埴川郡の全境にわたって土器等の遺物が散在していることが確認された。町教育委員会では、町史館にこの件を報告し保存の措置について協議したところ、この調査の主要施設については地元からの要望が強く、現地で保存が難しいことから工事に先立つ事前の発掘調査を実施して記録保存する措置を要することになった。そこで、昭和37年度の文化財保存事業費の補助金の申請を行い、発掘調査を実施することになった。補助金の決定通知が、数週間経過後であった。

調査の経緯

発掘調査は、調査の範囲から順境によって調査を実施し、その残りを整理しながら埴川の平面地図を編纂した。それと共に、国土地理院を二年半角点から引き、真北にあわせて5m×5mのグリッドを設定した。遺物の範囲によって本調査は、古墳時代中・後期を中心とする時期に営まれた集落跡であることが判明した。遺物の調査は、発掘区が遺跡の4区に設定されているため、全体的に調査であるものが少なく、調査区の間で土器調査を行うのが原則として実施したものである。なお、調査は、昭和37年12月5日から昭和38年2月21日まで実施し、現地での工事を終了した。

(表紙5)

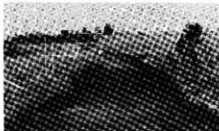




圖 1 雙樹寺河流域及伊爾其土庫遺址

1. 鳳雛寺遺址	6. 磨盤溝遺址 (特異地・1981)
2. 磨盤溝遺址 (坂本他・1986)	7. 十二天溝遺址 (鈴木他・1981)
3. 土方子遺址 (鈴木他・1981)	8. 磨盤溝遺址
4. 土方子遺址 (坂本・1981)	9. 磨盤溝遺址 (松岡・1982)
5. 松樹溝遺址 (特異地・1973)	

第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

地理的環境

本遺跡は、埼玉県立歴史と考古学総合博物館内に所在し、「埼玉県遺跡地図」の児玉町～嵐J的に位置する。

本遺跡周辺は、二波川支流の堤島片寄を基幹とする上武山地と、八丁～高橋街道を基にそれに沿って東に延びる第三紀礫多基幹とする児玉丘陵によって構成されている。また、この丘陵下には神流川によって形成された洪積扇状地である本庄台地があり、さらにこの台地端は上武丘陵地から流れ出る河川によって割断され、沖積地が形成されている。

遺跡は、この児玉丘陵の一支丘上に存在し、標高は、約100mから120mを誇る。この遺跡をのさめる丘陵下には、その北側に武内総合運動場付近にその源を留める金體川、また南西には児玉町大字内城内の上武丘陵地から流下する赤根川が流下し、本遺跡付近は、おおむねこの赤根川水系と金體川水系の分水嶺に相当している。本遺跡は、世帯に赤根川を臨み、本遺跡を穿せる丘陵下は、この赤根川によって夷平された沖積地が遠方に展開している。しかし、この沖積地は比較的狭く、また赤根川が運ぶ大量の土砂が堆積しており、赤根川の可能な周囲は狭いといえない。遺跡の北側には金體川水系に属する細い狭い谷が侵入し、片側だけの流水で水田を灌漑することができる。しかし、これもまた狭い谷であり、大きな可灌面積を望むことはできない。したがって、本遺跡の形成の要因は、これらの沖積地及び丘陵部にあったことが推定される。

歴史的環境

本遺跡の周辺には、各時代の遺跡が存在しており、弥生時代の遺跡には前期新石器遺跡（鈴木館、1986）、古墳時代前期では小形直文墓を出土した前期瀬戸田遺跡をはじめ、ミカド遺跡等（鈴木館、1983）等がある。古墳時代中期の遺跡には、金體川遺跡（利根川館、1983）、松戸城遺跡（高宮館、1973）また、後期では、ミカド遺跡（鈴木館、1983）等がある。本遺跡周辺の流域には赤根川を挟んで南側に新石器遺跡を臨み、南東約1.8kmには、長沖内遺跡（菅谷館、1980）が存在している。また、奈良～平安時代の遺跡には、十二次遺跡（鈴木館、1983）、磯和城遺跡（高宮館、1973）等がありさらに本遺跡の南西には、8世紀前半に比定される豊前産草文野丸瓦や4分の3割納瓦を出土している金草宮址（長岡、1982）、瀬戸田地帯をはじめとする児玉盆地がある。

本遺跡の南側に隣して土器や瓦が出土しているが、これは本遺跡の第1次第2次調査（凡）で中世の時代に付くものであることが確認され「高橋寺遺跡」と呼称しているものである。

（鈴木健哉）

遺跡）高橋寺後遺跡は、今回の第1次調査の地点をA地点、第2次調査の地点をB地点、第3次調査の地点をC地点とそれぞれ呼称した。

第1章 遺跡の概要

1. 遺跡の概要

本遺跡は、埼玉県児玉郡児玉町大字龍宮寺真護寺権を中心とする、丘陵上に存在し、その小字名から真護寺後遺跡と呼称する。真護寺後遺跡は、約12000㎡の広範囲に広がっており、調査地点別にそれぞれ、A・B・C地点と呼称し、今回の報告はこの内のA地点のものである。本遺跡（A地点）の発掘調査は、幅約4m、延長377mの面積約145.6㎡について行った。

発掘遺構

この調査によって検出された遺構は、縄文時代前期住居跡2軒、弥生時代前期住居跡2軒、古墳時代中期住居跡13軒、古墳時代前期住居跡9軒の計24軒の住居跡を始め、土坑28基、溝状遺構3基、その他がある。なか、本遺跡の調査にあたり、歴史的に調査区を1～4の4区に分けて実施した。

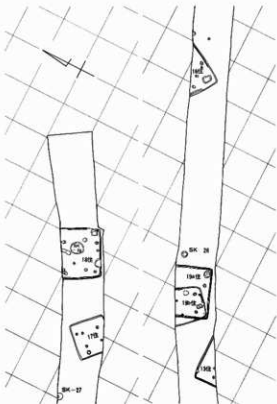
本遺跡から出土した遺物は、縄文土器（透磁ロ式、十二字筒式、変形ロ式）、弥生土器（甕式）、土師器（煎釜式、煎釜口式）、須恵器（須恵口式）、鉄器（瓦当類）、石製棺蓋片（煎釜一瓦当類）、その他があり、煎釜・煎釜口の遺物が主体である。

2. 基本層序



図2-1
土層基本図

遺跡の基本土層は、調査通りの縄文土層→褐色硬質土層→暗褐色テフラ層→暗褐色ローム層→透磁色ローム層→褐色土層（赤土層）の順に堆積しており、基本的には其の地域に一般的層序をなしている（第2図）。すなわち、褐色土層から暗褐色ローム層上部に達しているが、遺跡はそれぞれのローム層を切り込んで構築されており、概して遺構の保存は良い。



第3區：內陸分佈圖（1）

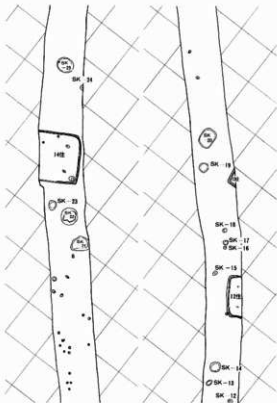


图 4-10 在剖面中找到的 全图 (1)

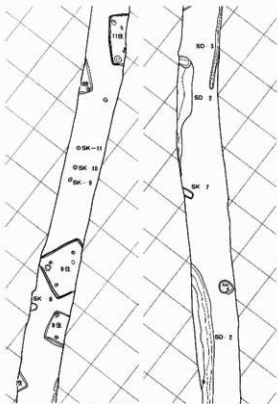


图 5 四 舢舨中纵剖面 全图 (2)

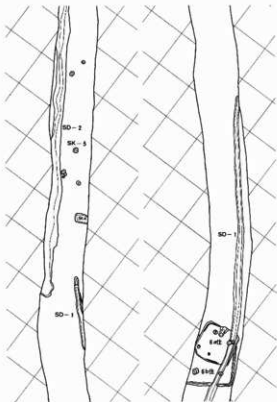


圖 6-10 直線中繼通線 全圖 (4)

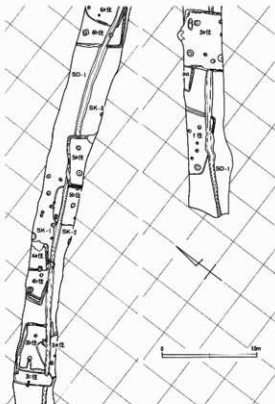


图 100 200m 比例尺平面图 (5)

第IV章 検出遺構の概要

1. 整穴住居址

第1号住居址 (第8図・図版2)

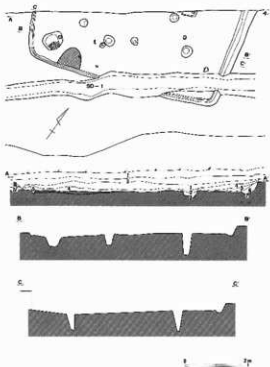
本址は、調査区の西端にあり、西側にやや傾斜をもつ地点に構築されている。本址の西端は、壁の一部が崩落によって倒平され、また内側は溝状遺構によって傾斜されている。規模は、東西6.5m、南北については不明である。1組方向は、N-25°-10°をとる。壁高は、東部で2.0m、平均で2.5mを測る。壁溝は、全体に存在していた可能性が高いと見えるが、傾斜のための重壁下と傾壁下の一部等に認められる。床面の状態は、比較的良好であり、土坑穴は、3本検出されており、4本柱穴の構造であると思われる。貯蔵穴は、東西コーナー付近で検出され、丸蓋式の壁の痕跡品が出土している。カマドは、その大半が破壊されているが、その東側の残土面が傾壁中央に検出され、カマドの存在が確認された。また、傾壁式上から、鉄釘が出土していることは特筆されよう。

第2号住居址 (第9・10・11図・図版3・4)

本址は、2軒の重複が認められ、新しい方を2a住、古い方を2b住と各々呼称する。

2a住は、住居の西側が調査区外にかかり、全体の形状は明らかではない。規模は、東西5.9m、南北については不明である。東端方向は、N-32°-10°をとる。壁高は、2.5.5cm-4.2.5cm、平均3.5cmを測り、その壁下に壁溝が連続的に認められる。床面の状態は、概して良好であるが、西側はやや傾斜である。土坑穴は3本検出されおそらく3本柱穴の一般的の構造を言っているものと思われる。カマドは、北壁に付設され、調査範囲内で構造部を確認することができたためその大半を調査し得たものと考えられる。しかし、住居の北壁自体が調査区外にかかり、カマドの全貌を明らかにし得たとは言えない。貯蔵穴は、カマドの西側(東側)にあり、15cm程度の痕跡品が底面より浮いた状態で検出されている。そのほか出土遺物には、丸蓋式の壁がカマドの東端部に張り込んだような状態で検出されているを始め、痕跡品が多く検出され、これらがカマドおよびカマドの右側にあたかも設置したような状態で分布していることは注目されよう。

2b住は、住居の東半部を2a住に切られ、さらに北半を調査区外にとるため全体の規模は明らかではない。1組方向は、N-25°-10°をとる。壁高は、2.2.3cm-4.5cm、平均3.5cmを測り、壁溝は一部に認められる。床面の状態は、概して較好である。土坑穴は、不明確でありその構造についても明らかに得なかつ



● 1999 年 12 月 1 日起

1号住居跡 土器整理

- 1層 埴輪彩色土 コームブロッカー・ローム粘土を多量に含む。彩色土を含む。埴土は多い。
- 2層 埴輪彩色土 コーム粘土を多量に含む。彩色土を含む。埴土は多い。
- 3層 埴輪彩色土 コーム粘土・ロームブロックを多量に含む。埴土を含む。埴土は多い。
- 4層 埴輪彩色土 コームブロッカーを多量に含む。ローム粘土・彩色土を多量に含む。彩色土を含む。
- 5層 埴輪彩色土 埴土・ローム粘土・ローム粘土を多量に含む。彩色土を含む。埴土は多い。
- 6層 埴輪彩色土 コームブロッカー・ローム粘土・彩色土を多量に含む。彩色土を含む。
- 7層 埴輪彩色土 コーム粘土・ロームブロッカーを多量に含む。彩色土を含む。彩色土は多い。

2号住居跡 土器整理

- 1層 埴輪彩色土 コーム粘土を多量に含む。埴土・ローム粘土・ローム粘土を多量に含む。彩色土を含む。埴土は多い。
- 2層 埴輪彩色土 コーム粘土。埴土・ローム粘土・ローム粘土を多量に含む。彩色土を含む。埴土は多い。
- 3層 埴輪彩色土 埴土・ローム粘土を多量に含む。埴土を含む。埴土は多い。
- 4層 埴輪彩色土 埴土・ローム粘土を多量に含む。埴土を含む。埴土は多い。
- 5層 埴輪彩色土 コーム粘土を多量に含む。埴土を含む。埴土は多い。
- 6層 埴輪彩色土 埴土・ローム粘土を多量に含む。埴土を含む。埴土は多い。
- 7層 埴輪彩色土 コームブロッカー
- 8層 埴輪彩色土 埴土・ローム粘土を多量に含む。ローム粘土・埴土粘土を多量に含む。埴土を含む。埴土は多い。

3号住居跡カマド 土器整理

- 1層 埴輪彩色土 埴土・ローム粘土・ローム粘土を多量に含む。埴土を含む。埴土は多い。
- 2層 埴輪彩色土 埴土・ローム粘土を多量に含む。埴土を含む。埴土は多い。
- 3層 埴輪彩色土 埴土・ローム粘土を多量に含む。埴土を含む。埴土は多い。
- 4層 埴輪彩色土 コーム粘土を多量に含む。埴土を含む。埴土は多い。
- 5層 埴輪彩色土 埴土・ローム粘土を多量に含む。埴土を含む。埴土は多い。
- 6層 埴輪彩色土 埴土・ローム粘土を多量に含む。埴土を含む。埴土は多い。

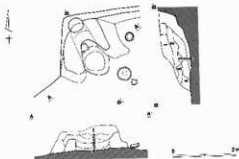


図3 3号住居跡カマド

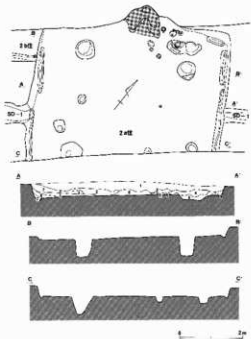


圖16 第2期牛房址

2b号住居址 土層説明

- 1層 明礬面土 おおむねローム粒子を含む。均質でこよりがある。
- 2層 明礬面土 ロームが面状に含まれる。均質で1層より少しより強い。
- 3層 明礬面土 ロームが面状に含まれる。均質で2層より少しより強い。
- 4層 面状土 ロームブロックが面状に含まれる。不均質でこよりがない。
- 5層 明礬面土 地2cm程度のローム塊が面状に含まれる。不均質でこよりがない。
- 6層 面状土 地2cm程度のロームブロックを含む。

3a・3b号住居址 土層説明

- 1層 明礬面土 ローム面状ブロックを面状に含む。均質で粘性ややあり。
- 2層 明礬面土 1層に類似するがロームブロックを多く含むより粘性が高い。
- 3層 明礬面土 風化土と砂土を含む軟質である。
- 4層 明礬面土 1層に類似するが脆し粒子を含む。やや不均質である。
- 5層 明礬面土 ロームブロックを含む。不均質で軟質である。
- 6層 明礬面土 粘土粒子が多量に含む。土質は弱中硬化している。
- 7層 明礬面土 ローム粒子・ロームブロックを含む。不均質で軟質である。
- 8層 明礬面土 ローム粒子を主体とする。均質で粘性ややあり。
- 9層 明礬面土 ローム粒子・ロームブロックを主体とする。不均質だがしきりなし。
- 10層 明礬面土 粘土粒子と小礫が多量に含む。軟質である。
- 11層 明礬面土 腐植物・粘土粒子・粘土粒子を含む。軟質である。
- 12層 明礬面土 土質に類似するが、粘土粒子を含む。
- 13層 明礬面土 土質に類似するが、やや強い。

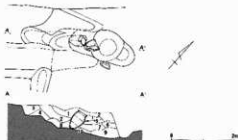
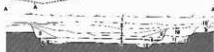
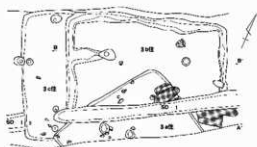


図11-10 第3号住居址の平面図



第12圖
第26号住居跡



第13圖 第3号住居跡

った。カマドおよび炉址は、焼炭されている。遺物は、小破片および細片のみの出土であった。

第3号住居址（第11・13区・図版5-6）

本址は、3軒の遺構が認められ、新しい方から3a住、3b住、3c住と各々呼称する。

3a住は、住居の南側が調査区外にかり全体の規模は明らかではない。焼炭は、東西については明らかではないが、南北3.9mを測る。主軸方向は、N-20°-Eをとる。壁高は、12cm-15cm、平均14cmを測り、壁溝が認められる。床面の状態は、概して軟弱である。柱穴は、明確ではなくおそらく無柱穴の構造を有しているものと思われる。カマドは、その大半を調査し得たものの、第1号溝状遺構（5取-1）に切られており、良好な保存状態とは遠くない。貯蔵穴は、焼炭されている。遺物は、瓦甎式土器が出土している。

3b住は、住居の中央部を3a住に切られ、かつ南側が調査区外にかりており全体の規模は明らかではない。焼炭は、東西3m、南北については不明である。主軸方向は、N-30°-Eをとる。壁高は、16.5cm-46.5cm、平均32cmを測り、壁溝が明確に認められ、また主柱穴にかかると壁柱切り欠の溝が検出された。床面の状態は、概して軟弱である。主柱穴は2本検出され、おそらく4本柱穴の一般的な構造を有しているものとされる。カマドは、その北半が溝状遺構に切られておりその半部は明らかではない。貯蔵穴は、検出されていない。遺物は、瓦甎式土器および磁器瓦器が床面より若干平行的状態で出土している。

3c住は、住居の東半部を3a住および3b住に切られており全体の規模は明らかではない。焼炭は、南北4.1m以上である。主軸方向は、N-20°-Wをとる。壁高は、22cm-27cm、平均24.5cmを測り、壁溝は認められない。床面の状態は、概して軟弱である。主柱穴は、不明瞭でありその構造についても明らかにし得なかった。また、炉址は検出されていない。遺物は、深溝式土器の小破片および細片が床面および覆土から、また打製石器の点、磨石1点が床面から出土している。覆土の状態は、硬質であり壁に近づくにつれてローム質になる。

第4号住居址（第14-15区・図版7）

本址は、2軒の遺構が認められ、新しい方から4a住・4b住と各々呼称する。

4a住は、住居の北側が調査区外にかり全体の規模は明らかではない。焼炭は、東西2.8m、南北については不明である。主軸方向は、N-30°-Wをとる。壁高は、14cm-19cm、平均16.5cmを測り、壁溝が良好に認められる。床面

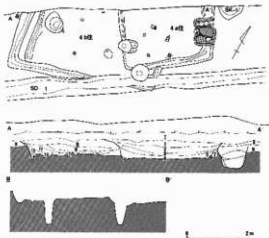


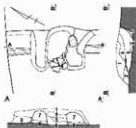
図14 図4-2の平面図

4a-6号住居址 土層説明

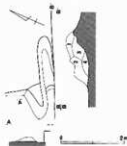
- 1層 砂礫層：砂と小礫の混合層で、礫の大きさは約1cm程度である。
- 2層 砂礫層：砂と小礫の混合層で、礫の大きさは約1cm程度である。
- 3層 砂礫層：砂と小礫の混合層で、礫の大きさは約1cm程度である。
- 4層 砂礫層：砂と小礫の混合層で、礫の大きさは約1cm程度である。
- 5層 砂礫層：砂と小礫の混合層で、礫の大きさは約1cm程度である。
- 6層 砂礫層：砂と小礫の混合層で、礫の大きさは約1cm程度である。
- 7層 砂礫層：砂と小礫の混合層で、礫の大きさは約1cm程度である。
- 8層 砂礫層：砂と小礫の混合層で、礫の大きさは約1cm程度である。
- 9層 砂礫層：砂と小礫の混合層で、礫の大きさは約1cm程度である。
- 10層 砂礫層：砂と小礫の混合層で、礫の大きさは約1cm程度である。
- 11層 砂礫層：砂と小礫の混合層で、礫の大きさは約1cm程度である。
- 12層 砂礫層：砂と小礫の混合層で、礫の大きさは約1cm程度である。
- 13層 砂礫層：砂と小礫の混合層で、礫の大きさは約1cm程度である。
- 14層 砂礫層：砂と小礫の混合層で、礫の大きさは約1cm程度である。

3a号住居址カマド 土層説明

- 1層 焼成褐色土 カーム粘土・粘土粘土を均一に含む。焼成しより異なる。
- 2層 灰褐色土 焼成土の中間を均一に含む。
- 3層 焼成褐色土 ローム粘土を微量に含む。焼成しより異なる。
- 4層 焼成褐色土 粘土粘土を多量に。カーム粘土・粘土粘土を微量含む。焼成しより異なる。
- 5層 灰褐色土 粘土粘土・粘土粘土を均一に含む。焼成しより異なる。
- 6層 焼成褐色土 ローム粘土・粘土粘土を微量に含む。焼成しより異なる。
- 7層 灰褐色土 焼成土の中間でブロックを多量に。粘土粘土を微量含む。焼成しより異なる。
- 8層 焼成褐色土 カーム粘土・粘土粘土・灰褐色粘土・粘土粘土を均一に含む。焼成しより異なる。
- 9層 灰褐色土 ローム粘土・ロームブロックを微量に含む。焼成しより異なる。
- 10層 灰褐色土 焼成土



第14図 3a号住居址 カマド



第15図 3b号住居址 カマド

4a号住居址カマド 土層説明

- 1層 焼成褐色土 焼成土の中間でブロックを多量に。カーム粘土を多量含む。焼成しより異なる。
- 2層 灰褐色土 ローム粘土・ロームブロックを多量に含む。焼成しより異なる。
- 3層 焼成褐色土 ローム粘土・粘土粘土を微量に含む。焼成しより異なる。
- 4層 灰褐色土 粘土粘土・粘土粘土を均一に含む。焼成しより異なる。
- 5層 灰褐色土 粘土粘土・粘土粘土を多量に含む。焼成しより異なる。
- 6層 灰褐色土 粘土・粘土・ローム粘土を少量含む。焼成しより異なる。
- 7層 灰褐色土 粘土層
- 8層 灰褐色土 粘土・ロームの中間でブロックを多量に含む。焼成しより異なる。

5a号住居址カマド 土層説明

- 1層 焼成褐色土 粘土粘土を多量に。焼成しより異なる。
- 2層 灰褐色土 粘土粘土を多量に。粘土粘土を少量含む。
- 3層 灰褐色土 粘土粘土の中間でブロックを多量に含む。粘土粘土を少量含む。
- 4層 灰褐色土 カマド施設である。色は、2層より、やや濃い。

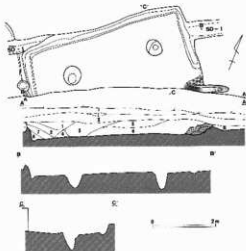
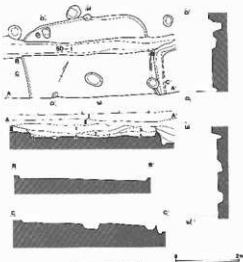


図17 図5のダム断面

3. 号ダム建設 土質調査

1. 号 土質調査 土質調査の結果、土質は硬い。
2. 号 土質調査 土質調査の結果、土質は硬い。
3. 号 土質調査 土質調査の結果、土質は硬い。
4. 号 土質調査 土質調査の結果、土質は硬い。
5. 号 土質調査 土質調査の結果、土質は硬い。
6. 号 土質調査 土質調査の結果、土質は硬い。
7. 号 土質調査 土質調査の結果、土質は硬い。
8. 号 土質調査 土質調査の結果、土質は硬い。

3. 号 土質調査 土質調査の結果、土質は硬い。



第18図 56号住居跡の平面

56号住居跡 土層説明

- 1層 暗褐色土 ローム殻子・ローム風土が局所的に含まれる。
- 2層 黄褐色土 少量のローム殻子を含む。此層で土質的転換点。
- 3層 暗褐色土 2層に類似するが、ローム殻子を多く含む。
- 4層 暗褐色土 ロームブロックを塊状や屑に含む。1層に似る。
- 5層 黄褐色土 ローム殻子・ローム風土を主成分とし、偶然、硬質である。

相 違 順 2>1>3>4>5 層

の法層は、概して良好である。主柱穴は、検出されず、おそらく無柱穴の構造を有しているものと思われる。オマダは、西壁に付設されており、電気式の燈が出土しているが、その保存状態は必ずしも良好とは言えない。貯蔵穴は、検出されていない。

イモ屋は、住居の南平部をⅡa区に認められ、かつ北端が調査区外にかかっており全体の構造は明らかではない。配管は、東西4.7m、南北については不明である。主軸方向は、N-13°-Wをとる。壁高は、1.7.5m-2.0m、平均2.0mを測り、壁高が明瞭に認められ、西平では二重認められる。床面の状態は、概して軟弱である。主柱穴は、Ⅱa区検出されおそらくⅡa区柱穴の一組的な構造を有しているものと思われる。オマダは、検出されておらず、Ⅱa区に認められているのかも知れない。しかし、遺物には、和風式土器が出土していることから伊達であった可能性もあろう。

第3号住居址（第14・17・18区・図面8）

本址は、2割の遺物が認められ、新しい方からⅡa区・Ⅱb区とⅡc区と呼称する。

Ⅱa区は、住居の南端が調査区外にかかり全体の構造は明らかではない。配管は、東西4.4m、南北については不明である。主軸方向は、N-13°-Wをとる。壁高は、1.6.5m-2.0m、平均2.0mを測り、壁高が良好に認められる。床面の状態は、概して良好である。主柱穴は、Ⅱa区検出され、おそらくⅡa区柱穴の一組的な構造を有しているものと思われる。オマダは、東壁に付設されており、その北平を調査したが南平は調査区外である。しかし、その保存状態は良好であるといえよう。貯蔵穴は、検出されていない。遺物は、電気式土器が出土している。

Ⅱb区は、住居の東西を横断するⅡ区に認められており、また南平は調査区外であり全体の構造は明らかではない。配管は、東西4.2m、南北については不明である。主軸方向は、N-13°-Wをとる。壁高は、1.5m-1.7m、平均1.5mを測り、壁高は認められない。床面の状態は、概して軟弱である。主柱穴は、不明瞭でありその構造についても明らかにし得なかった。伊達は、検出されていない。遺物は、小破片および陶片のみの出土であった。覆土の状態は、硬質であり壁に近付くにつれてローム質になる。遺物は、伊達式土器が出土している。

第4号住居址（第19・20区・図面9）

本址は、2割の遺物が認められ、新しい方からⅡa区・Ⅱb区とⅡc区と呼称する。

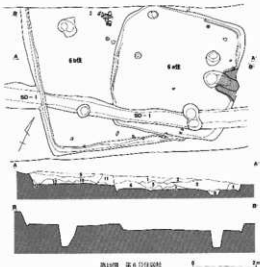


図16 第6号住居跡

第6号住居跡 土層説明

- | | |
|---------|---|
| 1層 埋戻土 | ローム砂子と白磁砂子と均一に混り、粘土も入り混じり。 |
| 2層 埋戻土 | ローム砂子。厚さ1.5mのロームブロックを多数含む。粘性なくしよりあり。 |
| 3層 埋戻土 | ローム砂子・黒土砂子と均一に混り。厚さ0.5mのロームブロック及び白磁砂子も多数あり。粘土なくしよりあり。 |
| 4層 埋戻土 | 厚さ0.5m程度のロームブロックを含む。粘性ありしよりあり。 |
| 5層 埋戻土 | ローム砂子を多数含む。厚さ0.5m程度のロームブロックも多数含む。粘土も入り混じり。 |
| 6層 埋戻土 | 厚さ0.5m程度のロームブロックを多数含む。粘性しよりあり。 |
| 7層 埋戻土 | ローム砂子・黒土砂子・白磁砂子と均一に混り。粘性しよりあり。 |
| 8層 埋戻土 | 黒化したローム土 |
| 9層 埋戻土 | ローム砂子・白磁砂子を多数含む。粘性なくしよりあり。 |
| 10層 埋戻土 | ローム砂子・白磁砂子・黒土砂子・白磁砂子と均一に混り。粘性しよりあり。 |
| 11層 埋戻土 | ローム砂子。厚さ0.5m程度のロームブロックを多数含む。 |
| 12層 埋戻土 | ローム砂子を多数含む。粘性ありしよりあり。 |

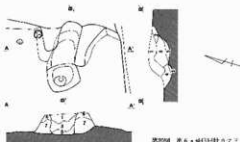


図24 2年目栽培時の土壌状態

2年目栽培時の方サド 土壌状態

- 1層 表層地土 方サド根が、心形地土を形成し、表土層が、表層地土を形成する。根が、心形地土を形成する。
- 2層 心形地土 表土層と心形地土を形成する。根が、心形地土を形成する。
- 3層 表層地土 表土層と心形地土を形成する。根が、心形地土を形成する。
- 4層 心形地土 方サド根が、心形地土を形成する。根が、心形地土を形成する。
- 5層 表層地土 方サド根が、心形地土を形成する。根が、心形地土を形成する。



図25 2年目栽培時の土壌状態

2年目栽培時 土壌状態

- 1層 表層地土 根が、心形地土を形成し、表土層が、表層地土を形成する。根が、心形地土を形成する。
- 2層 心形地土 表土層と心形地土を形成する。根が、心形地土を形成する。
- 3層 表層地土 表土層と心形地土を形成する。根が、心形地土を形成する。
- 4層 心形地土 方サド根が、心形地土を形成する。根が、心形地土を形成する。
- 5層 表層地土 方サド根が、心形地土を形成する。根が、心形地土を形成する。
- 6層 心形地土 方サド根が、心形地土を形成する。根が、心形地土を形成する。
- 7層 表層地土 方サド根が、心形地土を形成する。根が、心形地土を形成する。

る。土壁は、ほぼ全体を調査することができた。規模は、東西3.9m、南北3.9m以上である。主軸方向は、N-30°-Wをとる。壁高は、16cm-43cm、平均24cmを測り、壁溝が一部に認められる。床面の状態は、比較的良好である。主柱穴は、主軸内され、主軸柱穴の構造を有しているものと推られる。カマドは土壁に付設されており、その大平を調査したものの、その保存状態は良好であるとはいえない。貯蔵穴は、確認されていない。遺物は、焼成式土器が出土している。

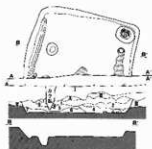
5土壁は、現状の中央部を5土壁に埋られ、かつ北壁の一部が調査域外にかかっており全体の規模は明らかではない。規模は、東西3.3m、南北については不明である。主軸方向は、N-30°-Wをとる。壁高は、25cm-43cm、平均33cmを測り、壁溝は明確に認められる。床面の状態は、概して転倒である。主柱穴は、4土壁内されおそらく4土壁穴の一次的な構造を有しているものと思われる。カマドは、5土壁に埋られているためか検出することはできなかった。また貯蔵穴も検出されていない。

調査7号住居址（第21図・図説10）

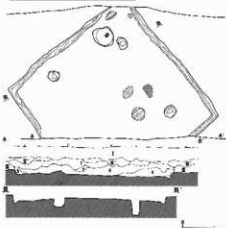
本址は、その西コーナーを調査することとなり、規模等は、明らかではない。主軸方向は、N-20°-Eをとる。壁高は、25cm-43cm、平均37.5cmを測り、壁溝は認められない。床面の状態は、比較的良好である。柱穴は、検出されず柱居の構造についても不明である。床面には緩いくぼみがあり、北壁の敷土穴が認められたが、調査の範囲からはカマドとは考え難く、付随である可能性がある。また、貯蔵穴は確認されていない。出土遺物には、焼成式と思われる土器片が出土している。

調査8号住居址（第22図・図説11）

本址は、住居の西壁が調査域外にかかり全体の規模については明らかにはなかった。規模は、東西3.3m、南北については不明である。主軸方向は、N-10°-Wをとる。壁高は、17cm-33cm、平均24.5cmを測り、壁溝は西壁下のみに認められる。床面の状態は、概して転倒である。主柱穴は、3土壁内されているが、開った構造を有しているものとはいえない。貯蔵が西壁中央に検出された。また床面の一部に焼土が認められたが、カマドを検出することはできなかった。貯蔵穴は、比較的小ぶりであるが、焼成式の器が、陶等の夾製品が出土している。



圖四四 龍山寺佛塔基



圖四五 龍山寺佛塔基

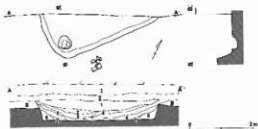


図10 第10号探査坑

8号探査坑 土層説明

- | | |
|---------|--------------------------------------|
| 1層 砂礫層土 | ローム地子、自然砂子と砂礫層土、砂礫層土、ローム地子。 |
| 2層 砂礫層土 | ローム地子と砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土。 |
| 3層 砂礫層土 | ローム地子（砂礫層土）ローム地子と砂礫層土、砂礫層土、ローム地子。 |
| 4層 砂礫層土 | ローム地子、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土。 |
| 5層 砂礫層土 | 砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土。 |
| 6層 砂礫層土 | ローム地子、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土。 |
| 7層 砂礫層土 | 砂礫層土と砂礫層土、ローム地子、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土。 |

9号探査坑 土層説明

- | | |
|---------|---------------------------------|
| 1層 砂礫層土 | ローム地子、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土。 |
| 2層 砂礫層土 | ローム地子、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土。 |
| 3層 砂礫層土 | ローム地子、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土。 |
| 4層 砂礫層土 | ローム地子、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土。 |
| 5層 砂礫層土 | 砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土。 |

10号探査坑 土層説明

- | | |
|---------|--------------------------------|
| 1層 砂礫層土 | 砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土。 |
| 2層 砂礫層土 | 砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土。 |
| 3層 砂礫層土 | 砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土。 |
| 4層 砂礫層土 | 砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土。 |
| 5層 砂礫層土 | 砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土。 |
| 6層 砂礫層土 | 砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土。 |
| 7層 砂礫層土 | 砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土。 |
| 8層 砂礫層土 | 砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土、砂礫層土。 |

第9号住居址（第22回・図版12）

本址は、住居の北コーナーの一部と面するが調査区域にかかっているといふ全体の規模には不明である。規模は、東西4.3m、南北4.8mである。主軸方向は、N-30°-Wをとる。壁高は、7cm-20.5cm、平均16cmを測り、壁高が土壁下および西壁下で変化しているほかはほぼ全体が認められる。床面の状態は、西壁より約1m程のところを観測した傾い面よりが平坦に存在し、その西側傾斜面を挟んで西壁はやや低くなるが転倒である。土坑穴は、3本検出されたがそれらも本址穴の一般的な構造を有しているものと見られる。茅葺は、住居のやや東側に検出され、少しはなれて北との分岐が認められたが傾斜的な茅葺としての構造は認められなかった。貯蔵穴は、北コーナー付近に認められている。遺物には、有蓋式土器が出土している。

第10号住居址（第24回・図版13）

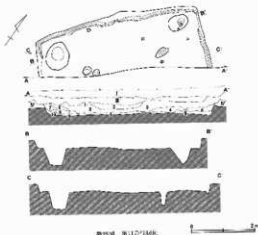
本址は、その面するコーナーを調査するにすぎず、規模等は、明らかではない。主軸方向は、N-30°-Wをとる。壁高は、34cm-55cm、平均45cmを測り、壁高は認められない。床面の状態は、比較的良好である。柱穴は、検出されず住居の構造についても不明である。茅葺は検出されている。貯蔵穴は、北東コーナー付近に検出されている。出土遺物は、有蓋式土器が出土している。

第11号住居址（第25回・図版13）

本址は、住居の南壁が調査区域にかかり全体の構造については明らかにしなかった。規模は、東西5.4m、南北については不明である。主軸方向は、N-30°-Wをとる。壁高は、18cm-35.5cm、平均25cmを測り、壁高が土壁下と東壁下に認められる。床面の状態は、9月生と類似した号次層位部が検出され、傾斜面は傾いて転倒である。土坑穴は、2本検出されているが、蓄った構造を有しているものとはいえない。茅葺は認められずおそらく貯蔵を仮設するものであると思われる。貯蔵穴は、住居の北東コーナー付近で検出されているが、あるいは北西コーナー付近に認められたビットも貯蔵穴かも知れない。遺物は、有蓋式土器が出土している。

第12号住居址（第26回・図版13）

本址は、住居の南壁が調査区域にかかり全体の規模については明らかにしなかった。規模は、東西4.4m、南北については不明である。主軸方向は、N-30°-Wをとる。壁高は、27cm-45cm、平均37cmを測り、壁高が壁下全周に認められる。床面の状態は、比較的良好である。土坑穴は、2本検出されており、



敷地面 第11号墳跡

11号墳遺構 土層説明

- | | | |
|-----|------|---|
| 1層 | 埋藏地土 | 暗褐色土を主体とし、暗褐色土を微量含む。粘性を失ひより厚し。 |
| 2層 | 暗褐色土 | 径3～3.5cmのボームブロッケ・ボーム粒子を多数に含む。粘性を失ひより厚し。 |
| 3層 | 暗褐色土 | 径3～3.5cmのボームブロッケ・ボーム粒子を少量含む。粘性ややありしより普通。 |
| 4層 | 埋藏地土 | 3層に類似するが、色調がやや暗い。 |
| 5層 | 暗褐色土 | 3層に類似するが、粘性ありしよりかなり強い。 |
| 6層 | 暗褐色土 | 基本層と類似するが径3～3.5cmのボームブロッケ・ボーム粒子を少量含む。粘性を失ひより普通。 |
| 7層 | 暗褐色土 | 6層に類似するが、色調がやや暗い。 |
| 8層 | 暗褐色土 | 6層に類似するが、色調は強いが暗い。 |
| 9層 | 暗褐色土 | ボーム粒子を多数に含む。粘性ややありしより厚し。 |
| 10層 | 暗褐色土 | 6層に類似するが、しまりがはるかに強い。 |

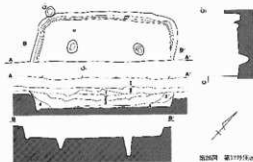


図26 瀬川河床断面

12号地点 土層説明

- 1層 河床砂礫土 河床内土を主とし、礫石層層を多く含む。河床内で礫石層層。
- 2層 河床砂礫土 河床内土を主とし、礫石層層を多く含む。河床内。
- 3層 河床砂礫土 河床内土を多く含む。河床砂礫土・河床砂礫土・河床砂礫土を多く含む。河床砂礫土を多く含む。
- 4層 河床砂礫土 河床内土を多く含む。河床砂礫土を多く含む。河床砂礫土を多く含む。
- 5層 河床砂礫土 河床内土を多く含む。河床砂礫土を多く含む。河床砂礫土を多く含む。



図27 瀬川河床断面

13号地点 土層説明

- 1層 河床砂礫土 河床内土を主とし、礫石層層を多く含む。河床内。
- 2層 河床砂礫土 河床内土を主とし、礫石層層を多く含む。河床内。
- 3層 河床砂礫土 河床内土を主とし、礫石層層を多く含む。河床内。
- 4層 河床砂礫土 河床内土を主とし、礫石層層を多く含む。河床内。
- 5層 河床砂礫土 河床内土を主とし、礫石層層を多く含む。河床内。

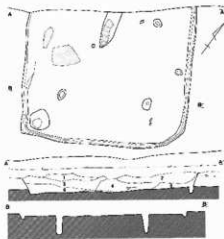


図26 第14号位址

14号位址 土層説明

- | | |
|---------|---|
| 1層 埴面赤土 | 粒1—3mm程度のロームブロックを少量、径1mm程度の丸山砂粒子を少量含む。粘質強くしりじり。 |
| 2層 埴面赤土 | 1層に類似するが、色調がやや暗い。 |
| 3層 埴面赤土 | 丸山砂粒子を多量に、径3—5mm程度のロームブロックを少量含む。2層よりやや強く粘質なくしりじり。 |
| 4層 埴面赤土 | 丸山砂粒子を多量に、ローム粒子を少量含む。 |
| 5層 埴面赤土 | 器土層に類似し、丸山砂粒子を少量含む。しりじり強い。 |
| 6層 埴面赤土 | 径1mm程度のロームブロックとローム粒子を少量含む。粘質ありしりじり強い。 |

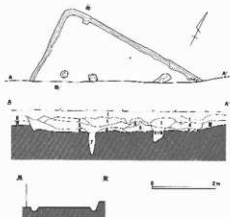


図24 第15号住居址

15号住居址 土層説明

- | | | |
|-----|--------------|---|
| 1層 | 砂礫土 | ワーム粒子を多数に、黒色土や黄白色に粘着含しこまり密着。 |
| 2層 | やや細かい
砂礫土 | 1層に類似するがワーム粒子を1層より少しく含む。粘着ややありしこまり密着。 |
| 3層 | 黒色土 | 基本部層に類似するが、ワーム粒や黄白色が含む。粘着ありしこまり密着。 |
| 4層 | やや粗い
砂礫土 | 1層に類似するがワーム粒より層よりやや多く含む。粘着ややありしこまり密着。 |
| 4'層 | やや粗い砂礫土上 | 基本的に1層と同様だがブロック状の底物を多く含む。 |
| 5層 | 砂礫土 | 若干の黒色土が黄白色に、ワーム粒子・黒土粒・黒土ブロックを含む。粘着ややありしこまり密着。 |
| 6層 | 砂礫土 | 砂礫土や黒色土を黄白色に多数に含む。粘着ややありしこまり密着。 |

比較的整ったプランを呈するものと推定される。伊能を伴葬するものであると思われるが、調査区内では検出することはできなかった。野間内は、検出されていない。遺物は、簡式土器の壺の蓋が壺型によりかかるとような形で検出された。なお、調査第1層中には簡式と認められる土器片が比較的多く検出されたが、それ以下の土層からの出土遺物は全て簡式土器であった。

第13号住居址（第27図・図版14）

本址は、その北コーナーを調査するにとどまり、規模等は、明らかではない。主軸方向は、 $N-81^{\circ}-11^{\circ}$ をとる。壁高は、 $30cm-40cm$ 、平均 $35cm$ を測り、壁溝は調査区内全域で認められた。扉面の状態は、比較的良好である。竈穴は、検出されず住居の構造についても不明である。オマダおよび貯蔵穴は、検出されていない。出土遺物は、簡式式のヨッポ類と壺の壺蓋などが簡土中より出土している。

第14号住居址（第28図・図版14）

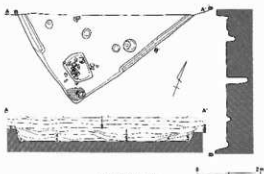
本址は、住居の北界が調査区外にみかき全体の規模については明らかにしなかった。規模は、東西 $4m$ 、南北については不明である。主軸方向は、 $N-20^{\circ}-11^{\circ}$ をとる。壁高は、 $8cm-18cm$ 、平均 $10cm$ を測り、壁溝が西壁下の一部で検出されなかった外は、比較的明瞭に認められる。扉面の状態は、簡して戦国である。主柱穴は、3本検出されており、比較的整った構造を有しているものと思われる。伊能は、住居中央のやや北よりに検出され、オマダは認められなかった。また、この伊能の外に2ヶ所の縄土が扉面より露子付いた状態で検出されている。貯蔵穴は、住居の南西コーナー付近で検出された。この貯蔵穴は、その北面に粘土が堆積している。遺物は、簡式土器が出土している。

第15号住居址（第29図・図版15）

本址は、その北コーナーを調査するにとどまり、規模等は、明らかではない。主軸方向は、 $N-31^{\circ}-11^{\circ}$ をとる。壁高は、 $8cm-18cm$ 、平均 $10cm$ を測り、壁溝は認められない。扉面の状態は、比較的良好である。主柱穴は、1本検出されたが住居の構造については不明である。なお、住居東端で白色粘土が検出されているが、オマダとは考えにくいものである。貯蔵穴は検出されていない。出土遺物は、簡式土器が出土している。

第16号住居址（第30図・図版15・16）

本址は、その南コーナーを調査するにとどまり、規模等は、明らかではない。



第32号 第16号探検地

16号探検地 土層説明

- 1層 灰褐色土 赤土層・黄土層の風化の面層で、散在して灰層が埋蔵に達しない。
- 2層 灰褐色土 1層に接するが、風化面が達しないロームゾーンの散在を含む層である。
- 3層 暗褐色土 風化の層が少く、ロームゾーンの層がほとんど全部である。
- 4層 暗褐色土 1層に接するが、ロームゾーンの層がほとんど全部・黄土・赤土層の面層に達する。風化層が少く含む。
- 5層 暗褐色土 ローム散在・ローム層がほとんど全部とし、風化層がほとんどない。
- 6層 暗褐色土 5層に接するがロームゾーンの層がほとんど全部に達しない。風化層が埋蔵に達しない。ロームゾーンのローム層がほとんど全部とし、風化層がほとんどない。
- 7層 暗褐色土

16号探検地 土層説明

- 1層 灰褐色土 風化土を所成面に含む。灰色散在を含む層で、ローム散在に達しない。
- 2層 やや暗褐色土 1層に接するが、1層より、ローム散在が埋蔵に達しない。ロームゾーンの層が少く含む。
- 3層 暗褐色土 風化散在・ローム土（暗褐色土）暗褐色土が埋蔵の面層に達する。ローム土、風化土に達しない。

16号探検地 土層説明

- 1層 暗褐色土 風化土を所成面に含む（暗褐色土）を埋蔵に達しない。ローム散在に達しない。
- 2層 暗褐色土 風化土（暗褐色土）散在・ローム散在（散在・ローム散在）を埋蔵に含む。ローム散在に達しない。
- 3層 暗褐色土 風化土（暗褐色土）を埋蔵に含む（暗褐色土）を埋蔵に含む。ローム散在に達しない。
- 4層 暗褐色土 ローム土（暗褐色土）の「風化散在」。

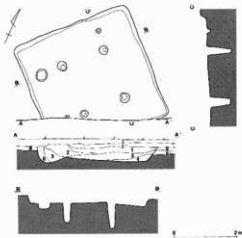
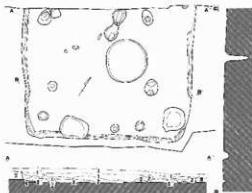


図33 第17号住居地

17号住居地 土層説明

- 1層 暗褐色土 ローム土を腐乱状に、白色粒子・ローム粒子を所々に含む。粘性あり。
- 2層 黒褐色土 若干の褐色土を腐乱状に、腐土粒子・ロームブロック・ローム粒子を所々に含む。腐面で粘性あり。
- 3層 褐色土 黒褐色土が腐乱状に、ローム粒子を腐乱状に、白色粒子・炭化物粒子を所々に含む。腐面で粘性あり。
- 4層 暗褐色土 3層に類似するが、3層より、やや明るい。
- 5層 暗褐色土 多量のローム粒子と径2-3mm程度のロームブロックが所々に、下の暗褐色土が腐乱状に含まれる。3層より腐面でなく粘性強い。
- 6層 やや暗い黄褐色土 渾身腐解の二次堆積で、ローム粒子を多量に、ロームブロック・黒褐色土を腐乱状に含む。腐面が粘性面に近い。

相 関 性 6>5>2>1>4>3 略



第32図 築山跡の平面図

埋蔵物調査 土層説明

- 1層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、黒色土を多く含む。コーム粒（径1mm以下）は散在し（径1mm程度）を多く含む。コームブロック（径1cm～3cm程度）を微量含む。1層より黒色土の侵入層は無く、色調は暗褐色。粘性なく、しまりは強い。
- 2層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、黒色土・白色磁子を微量含む。1層よりコーム粒の侵入層は無い。色調は極めて2層に近い。粘性ややあり、しまりは強い。
- 3層 暗褐色土 暗褐色土を主体とし、黒色土を少量含む。しまりは強い。
- 4層 暗褐色土 黒色土の侵入を円環として、色調は、1層と2層の中間色である。白色磁子には、ほとんど含まず、粘性ややあり、しまりは強い。
- 5層 暗褐色土 2層より、コーム粒の侵入は、やや多く、黒色土を散在的に侵入する。粘性あり、しまりは強い。
- 6層 暗褐色土 黒色土（面）を主体に暗褐色土や黄白色の褐色土を侵入する。粘性あり、しまりは強い。

地 層 順 1 > 2 > 3 > 4 > 5 > 6 > 7 層

主軸方向は、N-30°-Eをとる。壁高は、25cm-40cm、平均30cmを測り、壁面は両および東壁下に認められている。床面の状態は、比較的良好である。主柱穴は、1本検出されたが柱脚の構造については不明である。また、東西コーナー部に厚み約10cmの白色土層が検出されており、これは当館遺構の土主から、カマドではないかと考えて調査を進めたが、焼土・炭化物等が認められず、また影響もまともがなく、単なる粘土層の遺構であると考えてよい。貯蔵穴はコーナー付近に検出され、和風式の甕形の罎や罎が底面から浮いた状態で検出している。

第17号住居址（第31図・図版17）

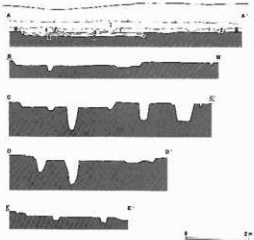
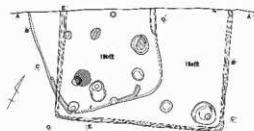
本址は、その東西コーナーが調査区外にかかっているとはいえ、全体の規模はほぼ、明らかである。その規模は、東西3.8m、南北3.8mである。主軸方向はN-33°-Eをとる。壁高は、11cm-32cm、平均20cmを測り、壁面は認められない。床面の状態は、比較的状態である。主柱穴は、4本検出され、一般的に住居の構造を明していると思われる。伊土、カマドおよび貯蔵穴は、検出されなかった。出土遺物は、新石器土器である。

第18号住居址（第32図・図版17）

本址は、住居の土層が調査区外にかかり全体の構造については明らかにしなかった。壁高は、東西3.5m、南北については不明である。主軸方向は、N-30°-Eをとる。壁高は、12cm-15cm、平均10cmを測り、壁面は東西コーナー付近の壁下の一部で検出される外は良好な形で検出された。床面の状態は、概して良好である。主柱穴は、4本検出されており、比較的良好な構造を有しているものと思われる。伊土は、何処か合のやや北よりに検出され、カマドは認められなかった。このが軸の構造は竪穴を呈するもので、そのくびれ部に「柱石」を施せる特徴的な形を有していることは推察しておきたい。貯蔵穴は、住居の東西コーナー付近で検出された。遺物は、和風式土器が出土している。

第19号住居址（第33図・図版18）

本址には、土層の表面が認められ、新しい方から25m-100mと各々推定する。100m位は、住居の北壁が調査区外にかかり全体の調査をすることはできなかった。したがって、その規模については明らかにしなかったが、東西も3mを測り、南北については不明である。主軸方向は、N-30°-Eをとる。壁高は11cm-40cm、平均20cmを測り、壁面は調査区外の壁下の全周で検出された。床面の状態は、比較的良好であり、特に北半部はおよび粘土部（3層）に非常に細



PLAN AND SECTION

質である。主柱穴は、2本横並みされており、2本の間の間隔を有しているものと思われる。炉跡は、座席のはば中央で検出された。また西側付近に粘土の塊が認められたが、焼酎的にカマドとする根拠は認められなかった。貯蔵穴は住居の西面コーナー付近で検出され、その位置から推いた酒甕で甕式式の形状が出土しているほか、覆土中からは甕式の破片が多く検出された。

19号住居は、住居の中央部を19号住居に切られ、かつ北側の一部が既述5号外にかかっており全体の形状は明らかではない。周縁は、東辺3.8m、東辺については平明である。北縁方向は、N-33°-Wをとる。壁高は、5cm-18.5cm、平均12cmを測り、壁高は壁下の一部に認められる。空間の形状は、比較的狭間で、覆土もまた硬質、固重である。主柱穴は、4本検出されているが、整った形跡とはいえない。炉跡は、19号住居の割り方に一部が切られているため、良好な状態とはいえないが、炉底の一部を推測することができた。貯蔵穴は検出されていない。遺物は、甕式を主体とする土器類である。

2. 溝状遺構

本遺跡で検出された溝状遺構は、3条であり、道路の敷道に平行するように走っているものである。これは、この敷道と関連をもつて掘られたものと考えられるが、その目的等は明らかにはできなかった。

SO-1 (図8・7図) 本址は、3区の一部と4区全幅にあたる、全長10mにわたって検出されたもので、1〜6号の各住居跡をすべて切ってつくられている。溝の方向は概ねN-33°-Eでであり、幅約0.6m、深さは約0.5mを測る。区画の形状は、比較的平明で、深さは一定している。全体の時刻は、浅間山系A層石を覆土中に含み、かつ近・縄代の遺物を含んでおり、比較的堅固の面であると考えてよいものである。

SO-2 (図8・4図) 本址は、3区のはば中央に位置し、延長10mにわたって検出されたものである。溝の方向は概ねN-33°-Eであり、幅約10cm、深さは約0.5mを測る。区画の形状は、比較的均一な凹凸を有するといふ深さは概ね一定している。本址の時刻は、浅間山系A層石を覆土中に含み、かつ近・縄代の遺物を含んでおり、比較的堅固の面であると考えてよいものである。

SO-3 (図8図) 本址は、2区・3区の境界に位置し、延長8mにわたって検出されたもので、溝の方向は概ねN-33°-Eであり、幅約0.6m、深さは約0.5mを測る。区画の形状は、比較的均一な凹凸を有するが、深さは一定している。本址の時刻は、浅間山系A層石を覆土中に含み、かつ近・縄代の遺物を含んでおり、比較的均しい時刻の面であると考えてよいものである。

3. 土 壁

本通称から検出された土壁は、断面加蓋であり、その砂壁から次の4型に分類される。これらの土壁の残存率は、第1面に掲げたとおりである。

A 型、平面砂壁が四角のもの

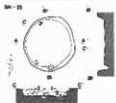
(1、上面が平肉のもの、2、小部で断面の丸いもの)

B 型、平面砂壁が楕円形のもの

C 型、平面砂壁が不整形のもの

表1 表 真鍮寺後遺跡土壁一覧表

番号	長	幅	厚	分類	備 考
1	80cm	—	154cm	A-2	扉形式
2	78cm	—	58cm	A-2	A 砂壁立ち
3	37cm	—	74cm	A-2	扉形式
4	—	90cm	23cm	B	A 砂壁立ち
5	54cm	46cm	36cm	A-2	A 砂壁立ちず
6	162cm	138cm	24cm	C	—
7	—	72cm	23cm	B	—
8	—	90cm	10cm	B	A 砂壁立ち
9	54cm	36cm	19cm	A-2	A 砂壁立ちず
10	120cm	46cm	17cm	A-2	扉形式砂壁
11	40cm	40cm	23cm	A-2	A 砂壁立ちず 断面一々に残存
12	48cm	40cm	36cm	A-2	A 砂壁立ちず
13	76cm	54cm	23cm	A-2	—
14	118cm	118cm	30cm	A-1	—
15	30cm	40cm	32cm	A-2	A 砂壁立ちず
16	40cm	36cm	14cm	A-2	— 断面に準あり
17	40cm	40cm	23cm	A-2	円筒状砂壁 (割断品)
18	48cm	40cm	24cm	A-2	A 砂壁立ちず
19	124cm	94cm	23cm	A-1	—
20	300cm	140cm	23cm	B	—
21	—	154cm	23cm	C	—
22	120cm	108cm	36cm	A-1	—
23	50cm	46cm	34cm	A-1	—
24	54cm	—	35cm	A-2	—
25	174cm	156cm	24cm	A-1	—
26	74cm	70cm	24cm	C	断面上部にA 砂壁残存あり
27	—	60cm	140cm	A-2	扉形式
28	160cm	130cm	36cm	A-1	A 砂壁立ちず 断面に準る



第24図 1.城(1)

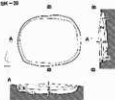
5K-22 土層説明

- 1層 暗褐色土 全体にローム粒子、ロームブロックを多数に、植物を少量含む。基本層厚のものと同様と認められる。粘性あまりなく、しまり有り。
- 2層 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロックを多く含む。1層より粘性を弱く、しまりが弱くなり、色調は暗い。
- 3層 暗褐色土 2層に類似するが、しまりが弱くなり色調は更に暗い。

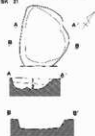
5K-23 土層説明

- 1層 黒褐色土 1層→2層のローム粒子を均一に、部分的にロームブロックを含む。植物を含むが基本層厚のものと同様と認められる。硬さやや有り、しまりが弱い。
- 2層 黒褐色土 1層に類似するが、ローム粒子が少なく粘性が若干減す。植物を含む。
- 3層 黒褐色土 1層に類似するが、ローム粒子の割合中に減減する。粘性は多いに増すがしまりが弱く。
- 4層 黒褐色土 3層に類似するが、ローム粒子も多く含む色調がやや明るい。
- 5層 黒褐色土 3層に類似するが、ロームブロックが含有される。
- 6層 黒褐色土 3層に類似するが、厚層の腐植ロームを若干含む。

5K-20



5K-21



5K-22



5K-23 土層説明

- 1層 黄褐色土 コーム粒子を少量、白色粒子を多量に含む。粘性はなく、しまり普通。
- 2層 暗褐色土 白色粒子を数個、コーム粒子を1層より若干多く含む。粘性なく、しまり普通。
- 3層 暗褐色土 白色粒子を数個、コーム粒子を2層より多く含む。粘性ややあり、しまり普通。
- 4層 やや硬い暗褐色土 基本層を土砂とし、黒色土を両土間に、白色粒子を多量に含む。粘性弱く、しまりなし。
- 5層 暗褐色土 4層に類似するが、色調がやや硬い。

5K-24 土層説明

- 1層 棕色土 コームブロックを多量に含む。粘性を含むが、基本層中のものと同様のものと混ざれる。粘性はほとんどなく、しまりが弱い。
- 2層 褐色土 1層に類似するが、色調はやや暗く、粘性が増し、しまりに更に固くなる。

第3図 土坑(2)

SK-1



SK-2



SK-24



第22図 土証(3)

SK-1 土層説明

- 1層 暗褐色土 基本層状に形成するが、軟弱で色調が暗い。
- 2層 褐色土 非常に硬質・緻密である。
- 3層 暗褐色土 1層に類似し、ローム粒子を主層とする。
- 4層 黒褐色土 2層の土にローム粒子を含んだもので、2層より軟弱である。
- 5層 褐色土 ローム風化土で、暗褐色土層と異なる。

SK-2 土層説明

- 1層 暗褐色土 多数のバー・アロームブロックと流石山系A群石を含み不均質である。
- 2層 暗褐色土 多数の流石山系A群石を含むがロームブロックが少ない。
- 3層 暗褐色土 1層に類似するが、ロームブロックが小さく均質である。
- 4層 黒褐色土 均質で基本層状に類似したものに流石山系A群石を含む。
- 5層 黒褐色土 1層と4層に類似し、混合した状態である。

SK-24 土層説明

- 1層 暗褐色土 植物根を全層に侵入し根石を含むが基本層状のものと思われる。土層の運動部分により最上部には石灰が混入。粘性がかなり強い。
- 2層 暗褐色土 根石を含み部分的に極めて緻密になる。色調は最も暗く、粘性がかなり強い。
- 3層 暗黄褐色土 ローム粒子を多数に侵入する。粘性が非常に強い。
- 4層 暗黄褐色土 3層に類似するが、ローム粒子をより多く含む。
- 5層 暗黄褐色土 4層に類似するが、こまりが少ない。



SK-9 土層説明

- 1層 暗栗褐色土 径1～2mmのローム粒子を微量に含み、所々に径3mm程度の炭化物が見られる。粘性に富みしまりを打する。



SK-10 土層説明

- 1層 暗褐色土 径1～2mmのローム粒子を均一に含む。粘性がなく、しまりを有する。



SK-11 土層説明

- 1層 暗赤褐色土 径1～2mmのローム粒子、径3mm程度のロームブロックを微量に含む。粘性がなく、しまりを有する。



SK-20 土層説明

- 1層 灰褐色土 浅間山系A層石の純粋で、径5mm大までの物を多量に含み、ローム粒子を均一に含む。粘性はまったくなく、しまりは層の下縁に行くに従って弱くなる。

- 2層 暗褐色土 黄褐色にローム粒・ローム塊粒子を多量に含む。しまりがなくブカフキである。

- 3層 黄褐色土 2層に類似するが、ロームブロックを多量に含む。



SK-27 土層説明

- 1層 灰褐色土 炭化物、炭化粒子を多量に、ローム粒子、焼土粒子を微量に含む。粘性はなく、しまりを有する。

- 2層 暗褐色土 ローム粒子、白色粒子を多量に含み、径1～2mmのロームブロックを微量含む。粘性はなく、しまりは1層より有る。

図37図 土記(4)



图 22 图 23

第V章 真鏡寺後遺跡の提起する問題—土器の住居内遺棄行為について—

真鏡寺後遺跡の第14号住居址等で認められた室敷土器の集中的出土状態は、現代の生活様式の消費活動による廃棄行為とは、おのずと異なっているはずである。古代社会において、充分使用に耐える土器類を廃棄する行為は、たとえそれが宗教的行為であっても、ある社会的関係と関連化された觀念であると考えてよい。本章では、真鏡寺後遺跡で認められたこの様な現象から、本遺跡周辺地域における土器の生産と消費の問題の一端に接近しようとするものである。

新石器時代中頃より縄文土器まで、住居内に土器が大量に、しかもそれがあつたかも知れない状態を示しているように出土することは、つとに注目されている。例えば、荒古町ミナト遺跡(坂本, 1981)や後遺跡跡(立川池, 1983)、本川市東川遺跡(石橋池, 1985)等で調査に認められるものであり、ミナト遺跡17号住居や後遺跡跡9・24・86・148号住居を典型としている。このような出土状態は、一方では当時の生活状態を考える上で重要な問題を提起し、あるいは住居の人員構成を知る手がかりをも提供するものであろう。加藤、いれゆる廃棄状態と考えられるものも認められるが、これらは生活に關わる消費活動として当然起こり得る現象であり、汎時代的な行為と思われる。ともあれ、この土器遺棄状態は、土器生産と消費の問題を考える上で、一つの大きな問題を提起するものであると考えてよいであろう。

よれ、この遺棄状態には、ミナト遺跡24号住居、後遺跡跡24号住居に認められるように、両面の一角に一定の配置を持った二次的な土器の遺棄状態を示すような特徴のあることにもまた注目しておくべきであろう。これらは、住居の廢絶あるいはその後に、ある意志を持った行為、おそらくはある宗教的な行為としての一定の祭儀が行われていたと考える事ができるものである。

このような、使用に耐えうる状態にある土器群の使用の中断は、一方では、カマドに設置された竈壁や竈、入れ子状に重ねられて出土する平皿など、当時の生活状態をとどめるかのような出土状態を示しており、これらはこのような出土状態から住居が稼働・休止する際に遺棄されたものであると考える事ができる。つまり、土器の利用状態とは直接関係なく、住居の稼働と土器の消費が行われていたことが想定されるのである。このような住居の稼働が、ある偶然的な事件によって中断されたとするには、土器の消費された状態は一般的であり、やはり住居の稼働も必然的に中断されていたものであるならば、その稼働の時点で新しい土器群が供給されたものと考えてよい。日常生活における土器の供給の形態は不明な点が多いが、この状況に準う土器群の供給が途切、その時点で一時的な一供給された場合、或は、日常的に土器群が集中的に供給され、住居の稼働の時点で供給されるかのどちらかであろう。しかし、現存住居一般では、先にみた土器の遺棄行為がかなり一般的であるところから、この土器の「供給—消費」の循環の中では、土器の消費は起こりやすく、生産と消費の一端を所も考え難い点からみれば、ある特定の場面に消費されていたと考えてよい。

このような、ある一定の場所に土器が蓄積されている状態は、日常生活の中での剰余分額の蓄積の一つの形態であると考えることができ、生産物における剰余分額の蓄積を考える場合、生産物と消費との関連や、他の労働生産物との関わりを考える必要がある。在地生産物への貨幣的買

制的な形態は、需要の付与に関わる利益の買納、あるいは取引議礼の費用や共同体的労働の償還のための償還の形態を取るものと考えられており、各種の労働生産物は、このような形態の中で直接のものと買納されていったものと思われる。したがって、先にみた土部型においても、ある特定の場所とは、このような在地首長の管理する場所であった可能性があろう。このことを、ここで特定することは難しいが、銅製品や鉄製品のような生産物での生産の遅い手工業生産物の場合、商品売買を想定せざるを得ず、あるいは、船舶生産も遠征が一般集団には付随してあらず、特定集団への集中する現象から、少なくとも集落間の分業の一定の償還を前提としていたと考えることができよう。また、土部型の場合も交易手段以降、土部型製作の費用の「回収する製作台」が使用されるなど、ある種の商品化の進行が想定されるところから、集落間での一定の分業を考える必要がある。つまり、土部型においてもそれが各集落で個別に生産されたわけではなく、なまの集落間の交通を前提としていたと考えてよい（図1）。

ともあれ、古墳群の設定に伴って移動させられたと考えられる集落の存在やそのほかの土地利用形態と集落の移動のあり方から推して、各集落内住民の成員は土地の占取主体であったとは考え難く、土地の占取は、これを管理する首長層に代表され、彼らの在地首長からの自立は困難な状態であったと考えられるところから、土部の買納も首長を介して行われると想定することはあながち不当なことではないであろう（図2）。つまり、共同体内の土地の占有や土部の占有は、首長を通して実現されていることが想定され、これらの交通の結節点に在地首長が存在したと考えておきたい。このような土部の買納による買納と、下贈という形式をとる再配分の機構は、共同体的な生産関係に関わる交通の一つの形式であると考えられよう。しかし、この共同体内の中での買納の過程で買納された物も生産物は、少なくとも後紀代には定みられた土部の重要状態は崩壊するところから、すでにそれらは共同体内に再配分するものとしてではなく、家長層の私産へと転化していたと考えてよい。ともあれ、少なくとも高麗時代からは、高麗・国分期に認められるような律令制的な買納制の形態をなす買納の形態が形成されており、更に律令制買納制にもなって発達する在地交通網の基盤もまた形成されていたと想定することができる（図3）。このような、古墳時代に認められる在地首長層にかかわる共同体的関係を基礎に、高麗・国分期の土部型生産が展開していったと考えることができよう。

以上、ここに本通説の調査で考えたいいくつかの点についての問題提起を行ったが、これらを含めた本稿の文は、『西経今世通説』の原文中で触れたいと考えている。（鈴木雄雄）

注

- (1) 土部型の「回収する製作台」の費用については、藤岡市部ノ内通説（志村、1962）、岡市市場通説（藤岡、1977）等で認められた坏通説の条切や直や、土部町天神体通説（小久保・長岡、1962）で認められるような土部製作台から切り離した敷地の存在、また、ユコナダ等の調査報告部が一所用しか認められないものがしばしば観察されるところから想定されるものである。なお、このことについては、取断を予定している。
- (2) この在地首長に関わる買納については、（鈴木、1984）において触れたことがある。
- (3) 律令制的買納に関わる土部の問題については、（鈴木、1984）を参照されたい。

引用・参考文献

- 石橋圭一郎 (1982) 『近阿蘇郡発掘調査報告：平塚市埋蔵文化財調査報告第3集第1分冊』
石橋圭一郎 (1984) 『日本の古代国家』 朝倉書店
小久保隆雄 (1980) 『美祿村・高野古戸』 埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業関係報告書第22集
前古之岡 (1972) 『熊野阿蘇郡発掘調査報告』 埼玉県埋蔵調査会報告第20集
阪本和雄 (1981) 『ミナト遺跡の調査』 『金沢遺跡群1』 埼玉県教育委員会
阪本和雄 (1986) 『熊野阿蘇郡発掘調査報告』 近阿蘇郡発掘調査団
佐々木孝雄 (1980) 『大久保山1』 平塚市大平市埋蔵文化財調査室
志村 四 (1980) 『熊ノ内遺跡群』 平塚市教育委員会
横井清之雄 (1988) 『長沖古墳群』 埼玉県教育委員会
阪本和雄 (1981) 『ミナト西遺跡の調査』 『金沢遺跡群1』 埼玉県教育委員会
阪本和雄 (1981) 『十二次遺跡の調査』 『金沢遺跡群1』 埼玉県教育委員会
阪本和雄 (1982) 『古代阿蘇郡の土地利用と村域の形成』 『阿阿蘇遺跡群』 埼玉県教育委員会
阪本和雄 (1984) 『いんやる北阿蘇郡上郎郡平の戦役』 『土曜春秋』 第3号
文石盛嗣 (1980) 『熊野』 埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業関係報告書第22集
横井清之雄 (1980) 『金沢遺跡群』 埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業関係報告書第3集
福岡孝志 (1982) 『金沢遺跡』 『埼玉県古代史財調査報告書』 埼玉県史料編纂人室
藤田健二 (1977) 『鎌倉市治地遺跡―鎌倉地区南地区―』 鎌倉市埋蔵文化財調査報告1

真鏡寺後遺跡発掘調査組織

- 司長 松澤中平 (埼玉県長)
顧問長 石井栄一 (埼玉県教育委員会教育長)
事務長 村上直男 (社会教育課係長・当時)
三上光一 (社会教育課主事・当時)
金子幸弘 (社会教育課主事)
組長 阪本和雄 (社会教育課主事)

発掘参加者 矢内 勲、志河内晴彦、千賀 智、徳山寿樹、水口 誠、加納 実、大塚道則、

坂本真輔

内田マナ子、大崎文子、島根ケム、島根ハナ、島根マナ子、島根ふう、倉野内早子
倉野内清美、倉野内富美子、小林マユ子、小林八重子、清水カズ江、杉山寛文、
小村留江、山崎文子、藤野雅二、森本俊昭江、森本くに子、森本次子、山田メズ江

圖 版



图版 1



图版 1 图 1 中华晚白垩世植物化石 (1)



图版 1 图 2 中华晚白垩世植物化石 (2)

図版 2

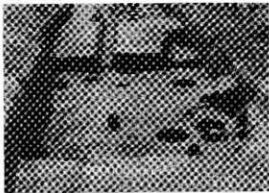


1. 真鍮分岐葉節 第1年生成葉一面より



2. 真鍮分岐葉節 第1年生葉節 断面より

圖版 3



1. 麻坡寺後遺跡 圖 2 a-b 同位質片

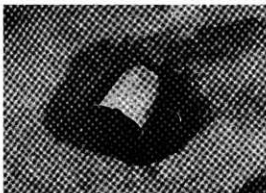


2. 麻坡寺後遺跡 圖 2 a 同位質片與麻坡寺後遺跡

圖版 4



1. 具結分枝邊跡 第 2a 徑面貼面物上紋路

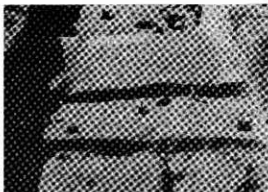


2. 具結分枝邊跡 第 2a 徑面貼面物上紋路

圖版 5



1. 高純度炭纖維 圖 3a-b-c 対応位置 北東より



2. 高純度炭纖維 図 3a-b-c 対応位置 北東より



1. 真核与低维菌 图 2b 位其地植物生长状态



2. 真核与低维菌 图 2b 位其地植物生长状态



1. 真核古菌的体 第 4a-b 号位地址 第 25 号

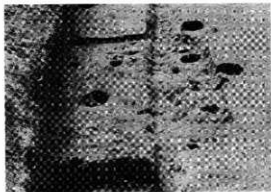


2. 真核古菌的体 第 4a-b 号位地址 第 25 号

図版 8



1. 真鍮溶液浸漬 縮5 $\times$ 明視野法 西より



2. 真鍮溶液浸漬 縮5 $\times$ 明視野法 東南より



1. 真綿寺後遺跡 第6a・b号住居址 南西より



2. 真綿寺後遺跡 第6a号住居址 カマア



1. 真綿石塊断面 調査風景



2. 真綿石塊断面 第7号埋藏地 北東より



1. 真隆寺秋道跡 第8号植物化石 北東より



2. 真隆寺秋道跡 第8号植物化石 野崎氏

图版12



1. 真端角腕壳类 第5号住址 北京上号



2. 真端角腕壳类 第5号住址 北京上号



1. 真龍寺後遺跡 第13号住居址 西より

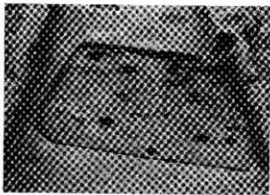


2. 真龍寺後遺跡 第12号住居址 北東より

圖版14



1. 武隆寺佛塔跡 第13号佛塔址 東南上中



2. 武隆寺佛塔跡 第10号佛塔址 北東上中



41. 图 41 为不规则的化石 呈黑色块状物



42. 图 42 为不规则的化石 呈黑色块状物

圖版14



1. 真綿寺鐵道跡 第16段(1)層配流物主土紋帶



2. 真綿寺鐵道跡 第16段(2)層配流物主土紋帶

圖版17



1. 蕨類植物葉面 葉脈的保存地 圖版17



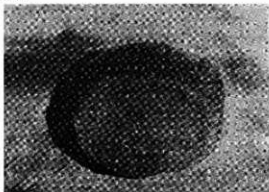
2. 蕨類植物葉面 葉脈的保存地 圖版17



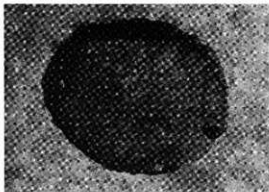
1. 高脚寺组化石 图版 18-1 刀位并距 北京 2. 9



2. 高脚寺组化石 图版 18-2 北京 2. 9



1. 西藏中侏罗统 第10层 北南上中



2. 西藏中侏罗统 第10层 北南上中

児玉町文化財調査報告書第7号

真鏡寺後遺跡Ⅰ

児玉町史跡調査部調査文化財保存委員会より調査報告書

昭和62年3月22日印刷

昭和62年3月22日発行

発行者 児玉町教育委員会

編集者 児玉町史跡調査部 大井八穂子氏

印刷所 たづみ印刷株式会社

埼玉県熊谷市東大井356